

錢形平次捕物全集

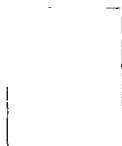
野村

野
村
胡
堂

錢形平次捕物全集



銭形平次捕物全集 14



昭和三十一年十一月五日 初版印刷
昭和三十一年十一月十日 初版発行

定価 二九〇円

著者 野村胡堂

発行者 河出孝雄
東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者 矢部富三
東京都千代田区神田小川町二ノ四

発行者

株式会社

河出書房

東京都千代田区神田小川町三ノ八
振替東京一〇八〇二番
電話東京(29) 三七一―九

目

次

夕立の女……………一

毒酒薬酒……………三

恋患い……………六

群盗……………八

娘と黒法師……………一九

人違い殺人……………二九

腰拔け弥八……………一七

猿廻し……………二九

風の糸目……………三八

春宵……………三三

万両分限……………二九

女御用聞き……………四〇



夕立の女

—

江戸八百八丁が、たった四半刻のうちに洗い流されるのではあるまいか——と思うほどの大夕立でした。

「わッ、たまらねえ。何処かこう小髷のあたりが焦げちゃいませんか、見て下さいよ」

一陣の腥さい風といっしょに、飛沫をあげて八五郎が飛び込んで来たのです。

「あッ、待ちなよ。そのなりで家の中へ入れちゃたまら

ない——大丈夫、髪かみの毛けも頸のどの先も別条はねえ。雷鳴かみなりだッて見境があらアな、お前なんか落ちてやるものか」
平次は乾いた手拭を持って来て、ザッと八五郎の身体を拭かせ、お静が持ってきた単衣ひとえと、手早く着換えをさせるのでした。

全く焦げつきそうな大雷鳴でした。そうしているうちに、縦横に街々を断ち割る稲光り、後から後からと、雷鳴の波状攻撃は、あらゆる地上の物を粉々に打ち砕いて、大地の底に叩き込むような凄まじさでした。

「驚きましたよ。あッしはもうやられるものと思ひ込んで、四つん這いになって此処へ辿り着くのが精いっぱい——どうも腹の締りが変な氣持ですが、臍はらが何うかなりやしませんか知ら——」

「間抜けだからな、自分の臍を覗いて見る恰好なんてものは、色気のある図じゃないぜ。第一お前の出臍でせなんか抜いたって、使い物にならないとよ。味噌みそがきき過ぎているから」

掛け合い話の馬鹿馬鹿しさに、お静はお勝手へ逃げ込んで、腹を抱えて笑いを殺しています。

よいあんばいに雷鳴も遠退いて、プチまけるような雨だが、未練がましく町の屋並を掃いて去るのです。

「それにしても大変なことでしたね。御存じの通り、あッ

しは雷鳴様は嫌いでしょう」

「——雷鳴は鳴る時だけ様をつけ——とね、雷鳴を好きだという旋毛曲りも少ないが、お前のように、四つん這いになって逃げ出すのも滅多にないよ。あの恰好を新造衆に見せたかったな」

「さんざん見られましたよ。何しろ明日は神田祭だ、宵宮の今晚から、華々しくやるつもりで踊り舞台にボツリボツリと降って来た夕立のはしりを避けていると、あの江戸開府以来という大雷鳴でしょう」

「江戸開府以来の雷鳴という奴があるかえ」

「ともかくも、そのでっかいのが、ガラガラドシンと来ると、舞台にいた六七人の踊り子が、——ワッ怖いッ——でんで、皆んなあっしの首ッ玉にブラ下がったんだから大したもの、あんな役得があるんだから大かい雷鳴もまんざら悪くありませんね」

「罰の当った野郎だ」

「そのまま鳴り続けてくれたら、あっしは三年も我慢する気でいましたよ、——ところが続いてあの大夕立でしょう。プチまけるようにどっと来ると、女の子はあっしの首ッ玉より自分の衣裳の方が大事だから、チリヂリバラバラになって近所の家へ飛び込んでしまいましたよ。一人くらいはあっしと一緒に濡れる覚悟があってもよいと思いま

すがね」

「呆れた野郎だ」

「空っぽの舞台で、大の男が濡れ鼠になるのも気がきかねえから、川越えをする気分で、雨の中を掻きわけ掻きわけ、四つん這いになって此処まで辿りつきましたよ」

「何が面白くて、空模様構わず、手踊りの舞台にねばっていたんだ」

「六七人の女の子が、いきなりあっしの首ッ玉にかじりつきそうな空合いでしたよ」

「馬鹿な」

「それは嘘だが、喧嘩があったんですよ、——女と女の大騒ぎ、名古屋のお三に不破のお伴」

「それは手踊り番組か」

「なアに、実は小唄の師匠のお園と、踊の師匠のお組の顔み合いで、いやその激しいということは、親分にも見せたいくらいのものでしたよ。あっしも女と女の命がけの喧嘩というのを、生れて始めて見たが——」

「そいつも江戸開府以来来じゃないのか」

「飛んでもない、あんなのは神武以来ですよ。最初はネチネチといや味の言い合いから、だんだん昂じて甲高い口喧嘩。それから触ったり、打ったり、引っ掻いたり、とうとう髪をむしり合いから、左四つに組んで水が入る騒ぎ——」

「何んだえ、水が入るとは」

「あの大夕立ですよ。天道様だって、あんなキナ臭い喧嘩は見ちゃいられませんよ」

八五郎の説明は、面白可笑しく手振りが入るのです。

「そんな大喧嘩を始めるには、深いワケがあるだろう。言葉の行き違いと言った、手軽なことじゃあるまい」

「良い年増と年増の喧嘩だ。食物の総や酒の上じゃ、あんなにまで恥も外聞も忘れて、引っ掻いたり噛みついたり、命がけで揉み合えるものじゃありません」

「男のことか」

「図星、さすがは銭形の親分」

「馬鹿にしちゃいけない」

「情事となると、恐ろしくカンの悪い親分が、今度は当りましたよ。鞆の目当ては、金沢町の平野屋の若旦那金之助——口惜しいがあっしじゃありません」

「で？」

八五郎の話術に引入れられて、平次も少しばかり興が動いたようです。

「それからガラガラドシンの、六七人あつしの首っ玉にかじりついて匂わせの、大夕立と来たわけで、敵も味方も何処へ散ったか。あとは四つん這いの、借着の単衣の、お先煙草の——ああ、熱い茶が一杯呑みてえ」

こんな調子で筋を語る八五郎でした。

二

昔の江戸は、非常に雷鳴の多いところで、甲州盆地や、上州の平野で育てられた雲の峰が、気流の關係で大部分は江戸の真上に流れ、ここで空中放電の大乱舞となって、日に一度は夏の江戸っ子の胆を冷やさしたのです。

電気事業の発達は、雷鳴や夕立を非常に少なくしたことは、敢て故老を俟つまでもなく、誰でも一応は知っております。

その雷鳴や夕立は、どんなに一般人の恐怖と尊崇の的であつたか、宝井其角が『三屈』の発句を詠んで、夕立を降らせたという伝説が、真面目に信ぜられた時代の人達の心持は、今の人には想像もつかぬものがあつた筈です。

蚊帳と線香と桑原の呪文で表象される迷信的な江戸っ子が、大雷鳴、大夕立の真っ最中に、冒瀆的な言動、——わけても人殺しなどという、だいそれたことをやりそうもないことは、容易に想像され得ることで、ここで起つた大雷鳴の真最中の犯罪が、どんな意味を持つかと言うことは、この事件の大きな鍵の一つになるのです。

八五郎が踊り舞台の女の喧嘩の話を、面白おかしく続けているうちに、大夕立もようやく霽れて、九月十四日の夕

陽が、西窓から美しく射し込んで来ました。

「あれ、八五郎さん、まだお帰りじゃないでしょうね。今お憫がついたばかりですのに」

モゾモゾと腰をあげかける八五郎に、お静は声を掛けました。

「ヘエ、一杯御馳走して下さるんですか」

「不思議そうな顔をするなよ。俺のところだって年中粉煙草ばかりが御馳走じゃない——明日は年に一度の明神様の御祭りだ」

平次は盃を挙げました。大きい膳に並べた料理は、ひどく貧乏臭いものですが、お静の心尽しが隅々まで行亘って、妙にこうホカホカとした暖かいものを感じさせるのです。

「明神様の宵祭か——一升提げて来るんでしたね、親分」

八五郎は鼻水を横なぐりに拭いて、盃を頂くのです。この涙もろい男は、どうかしたらもう溜っぽくなっているのかも知れません。

でも、二つ三つ傾けると、陶然として、天下泰平になる八五郎です。

「親分、ちょいと来て下さい」

入口の格子を叩いたのは、顔見知りの隣り町の指物職人——というよりは、小博多を渡世にしている、投げ節の小三郎という男でした。

「何んだ、何があったんだ」

平次は盃を置いて中腰になって居ります。小三郎の穏かな調子のうちにはガラッ八の『大変』以上の緊迫したものを感ぜさせるのです。

「横町の師匠がやられましたよ」

「横町の師匠？」

この辺は師匠だらけ、生花、茶の湯から、手踊り、小唄、琴、三味線、尺八まで軒を並べているので、平次も一寸迷ったのです。

「小唄の師匠——江戸屋園吉のお園さんで」

「お園さんが殺された？」

八五郎は横から口を出しました。少しホロリと来ております。

「そうなんです、親分」

「お園が——？ 先刻、お組と掴み合いの喧嘩をしたぜ」

「気が立っていて、首でも縊りそうな見暮だったそうです」

「ともかく、行って見ることだ」

平次は手早く支度をする、夕立の上がったばかりの街へ、足駄のまま飛び出しました。それに続いたのは、借着のままの八五郎と、投げ節の小三郎。

三

明日の神田祭を控えて、九月十四日の明神下——御台所町、同朋町から金沢町へかけては、全く湧り返るような賑わいでした。

日枝神社の山王祭と共に、御用祭又は天下祭と言われ、陸年に行われたこの威儀は、氏子中の町々を興奮の坩堝にし、名物の十一本の山車が、人波を掻きわけて、警固の金棒の音、木遣りの声、金屏風の反映する中をねり歩いたのです。

前夜の宵宮も、一種の情緒を持った賑わいで、江戸でなければならぬ面白さでしたが、その日は生憎の大夕立で出足を阻まれ、平次とガラッ八が出動する頃になって、残る夕映の中に、ようやく町々の興奮は蘇返って行く様子でした。

「此処ですよ」

小三郎は小唄お園の家へ案内し、格子の前で立ち淀みました。中は内弟子と近所の衆で、何やら取留めもなく騒いでおります。

入口の格子の横手は少しばかりの空地で其処には手踊りの師匠、坂東久美治こと、お組の踊り舞台が掛けてあり、大夕立に叩かれて、見る影もなく塩垂れております。

「御免よ」

平次と八五郎は、その中へ入りました。

「ま、親分さん方」

出迎えたのは五十五六の老母、それは殺されたお園の養い親で、お横という因業な女——と八五郎は心得ております。

「師匠が、——気の毒だったね」

「親分、どうしましょう。私はもう木から落ちた猿で」

お横は日頃の因業さをかなぐり捨てて、ひどく打ち萎れております。

たった三間の小さい家、その一番奥の六疊に、殺された師匠のお園が、血だらけの死体を横たえているのです。

平次と八五郎の姿を見ると、弟子たちも近所の衆も、遠慮して縁側に立去り、凄惨な死の姿が、覆うところもなく二人の眼に曝されます。

「こいつはひどい」

八五郎は音をあげました。

股や裾は、母親の手で僅かに隠されましたが、床を敷いて襦袢を引っ掛けて休んでいるところをやられたらしく、斑々たる上半身を起して見ると、首から顔へかけて、突き傷が三四カ所、盲目突に突いた一と太刀が、偶然に頸動脈を切ったのが致命傷らしく、あとの傷は心得のない下手人

が、駄目押しに突いたとしか思えない、無気味なものです。

死顔には、さしたる苦悩もなく、お園の美しさは、血の洗礼も奪う由はありません。引締ったクリーム色の肌、美しい生え際、大きい眼は見開いておりませんが、それは極めて無心な死の苦悩のないもので、ほのかに開いた唇から、真珠色の白い歯の見えるのも、妙な艶めかしさを感じさせるのです。

胸は少しはだけて、乳のふくらみのほの見えるのも、踏みはだけたらしい股に、血潮に染んで大きい掌の跡らしいものの残るのも、下手人の性格を暗示しているようで、歪んだ姿態とともに、平次の注意をひきつけます。

「師匠が一人でいたのか」

あれほどの殺しを——いかに大夕立の中と言っても、隣りの部屋の者が知らない筈はありません。

「大変な見幕でした。あんまり怖いので、お弟子さん方も帰ってしまい、私もお隣りの菓子屋さんへ行って、夕立の止むまで無駄話をしておりました。外の雷鳴より、内の雷鳴の方が怖かったです」

母親のお横は言うのです。口辺に漂う苦笑を、あわてて掻き消して、精いっぱいの真剣な顔になるのは、かなりの見物でした。

お園の美しさと、その激しいヒステリーの発作のことは、平次も聴かないではありませんが、手踊りの師匠のお組と掴み合いの喧嘩をした後の凄まじい発作は、恐らく因業で聞えた母親さえも、三舎を避ける外は、なかったのでしょう。

「縁側は開いていたんだね」

平次は重ねて訊きました。

「あの娘は上気せると、雨だろが風だろが、閉めきってなんか置けない性分でした。風下の雨戸を一枚開けて、枕を出して横になっていたんでしょ」

腹を立てると起きてはいられない女——その激しいヒステリー性の怒りの発作が、この女を殺させる原因になったのかも知れません。

「刃物は？」

平次は四方を見廻しました。其処にはこの女を突き殺したような、鋭利な刃物などは転がってはいそうもありません。

「雨がやんでから、御近所の子供衆がこれを拾って来ました。庭に捨ててあったんだそうです」

母親は四つ折の手拭に畳み込んだ匕首を一本、縁側の隅から持って来ました。無気味なものを持った手が、少し顫えていゝのも無理のないことです。

「」
手に取って見ると、よく光っておりますが、泥と夕立に洗われながらも、血脂ちあぶらのべっとり浮いた、刃渡り六七寸の、凄こわい匕首しほびです。

「こいつは誰のだ。持主はわかってゐるだろう」

平次は物の気配に後ろを振り向きしました。そこには、平次といっしょに来た『投げ節の小三郎』が、真蒼まそうになつて突っ立っているのです。

「」

「お前のだろう」

「先刻踊り舞台の楽屋へ忘れて来たんです——あっしじゃありませんよ。師匠を殺したのは」

小三郎は、柄にもなく、タガが弛ゆるんだように、ガタガタしているのです。小作りですがちよいと好い男で、臆病なくせに遊びが好き——と言つた肌合らしく見えます。

四

「親分、妙なものが来ましたぜ」

八五郎が拇指おほさきを鰻うなぎにして、自分の肩越しに入口の方を指さすのです。

「誰だえ？」

「喧嘩の相手、踊りの師匠のお組が、お悔くやみに来たんだか

ら大変でしょう」

八五郎は存分に面白そうです。この男の守り本尊あまのの天邪鬼てんじゃが、どこかを樂たのぐつてでもいそうな顔でした。

「町内付き合いたもの、お悔くやみにも来るだろうよ」

平次はたいして気にもしない様子ですが、入口の方では、ヒソヒソと声を忍しのばせながらも風雲の唯ならぬものを感じさせます。

「でも、お前さんからお悔くやみを言つて貰う筋合いはありませんよ」

それは母親のお模まの声でした。

「私は悪うございました。師匠とつまらない喧嘩なんかして。でも、もともとつまらないことなんで、日頃仲の良かった師匠が死んだと聞くと、じつとしてはいられたかったですもの、せめて、仏様の前で、一言詫わびを言わして下さいな、おっ母さん」

お組の声はすっかり萎しなれております。お園と張合つて、一寸も退ひけを取らなかつたお組にしては、それは思ひも奇きらぬ挫くけようです。

「おっ母さんなんて、言つて貰いたかアありませんよ。先刻さき揃そろみ合あひをしたばかりのお前さんを通しちや、娘だつて浮うばれないにきまつている」

「でも」

「さア、帰って下さい。大夕立が来なきや、舞台の上で、お前さんが掴み殺したかも知れないじゃないか」

母親のお楨は、頑として関所を据えるのです。

「八、放って置くと、又何が始まるかわからない。お前が口をきいて、お組師匠を隣りの部屋まで通して貰うがよい」

平次は見兼ねて仲裁案を出しました。それから一と揉みの後、八五郎のとぼけた調子が、どうにか母親を撫めて、お園の死骸のある隣りの部屋まで、お組は誘い入れられました。

「師匠、たいそうな萎れようだね」

平次は近々と膝を寄せました。

「でも、私と喧嘩をして、間もなく死んだと聴いて、私はもう、いても起ってもいられなかったんですもの」

お組は顔を挙げました。髪下が露を含んだようで、浴衣に染めた源氏車が、重々しく肩にのしかかるのです。

殺されたお園より一つ二つ若くて、三十前後と聴きましたが、磨き抜かれた肌の美しさや、よく整った顔立らは、どう見ても二十四五としか見えず、お園のややブロークシな道具立ての魅力に比べて、それは端正な古典的な美しさとも言えるでしょう。

「何んだって又、女だてらに掴み合いの喧嘩なんかしたん

だ」

平次は静かに言い進みました。

「お隣りの空地へ、踊り舞台を拵えるのに、お園さんに挨拶をしないのが悪かったんです——でも、悪意で、つい後で断わればよからうと思ったのが、師匠の氣に入らなかったのでしょう」

「それっきりか」

「あとは、髪へさわったとか、変な眼で見たとか、——女同士の喧嘩の種は、殿方にはわかりやしません」

お組はさり気なく言って、ほろ苦笑うのです。

「情事の揉めがあったそうじゃないか」

八五郎は横合いから口を出しました。相手が何人であろうと、これを言わずにはいられない八五郎です。

「飛んでもない、八五郎親分」

「いや、平野屋の若旦那を奪り合って、事毎に噛み合っていたことは、町内で知らない者はないぜ」

「ひと頃は、そんなこともありましたが。でも近頃平野屋の若旦那は、許嫁のお嬢さんと、いよいよ祝言することに決り、お園さんが執つく絡みつくのを、ひどく嫌がっていました」

「——」

「平野屋の若旦那と仲の好いのは私の方で、そんなことで

殺されるなら私の方が殺されなきゃなりません」

お組はこうはっきり言いきるのです。

五

「それに——」

お組はなおも続けました。

「私は雷鳴が大嫌いで、鳴り出すともう生きた空もありません。家へ帰ると雨戸を締めきって蚊帳を吊って線香を焚いてお念仏ばかり称えていたんですもの。人なんか殺すどころか、物を言う力もなく弟子たちを追っ払って、死んだようになっていました」

お組はそう言って、自分の雷鳴嫌いを証明してくれる相手を探すように、そっと四方を見まわしました。

「気色が悪いぞ師匠。誰もお前さんが、お園師匠を殺したとは言やしない」

平次はさり気ない調子でした。

「それで安心しましたよ。嘘だと思ふなら、私の家へ行って訊いて見て下さい。あの大夕立の間、私はもう死んだもののようになつて寝ていたんですもの」

「お前の家というのは、ここから遠い筈じゃないか。よく濡れずに駆けて行ったことだな」

「表から廻れば遠いようでも、路地を抜けて、大家さんの

家の庇の下を通して貰えば直ぐですよ。ピカリと来て大きいのが鳴るとすぐ、私はもう喧嘩も何も忘れて帰ったんですもの。家へ飛び込むとすぐ、あの大雨がどっと来ましたよ」

お組の報告は詳し過ぎます。

「ところで、師匠には心当りがあるだらう。お園を怨んでいる者は誰だ」

「第一番は投げ節の親分」

お組はそっと四方を見ました。匕首のことから話が妙になつて、小三郎はもうそこには姿を見せなかったのです。

「それから？」

「御浪人の阿星右太五郎様」

「お園を追ひ廻しているという噂があったな」

「平野屋の若旦那は、お園さんを怨んではいけないが、邪魔にはしていましたよ。尤も許嫁のお夏さんは、心から怨んでいたように」

「そんなことかな」

「お新さんだって、お円さんだって、お園さんを怨んでいないとは限りません。町内の若い男を皆んな手なずけて、狼の遠吠見たいな声を出させるんですもの」

お組はチラリと鋒鋦を出しました。

「何んだとえ、狼の遠吠で悪かったね。そう言うお前こそ、

案山子に魔が差したのを教えているくせに」
母親のお榎は我慢のならぬ顔を次の間から覗かせるのです。

「もうよい。仏様の前だ。お互に喧嘩はたしなむことだ」

平次はもう一度、この女同士——老いたると若い者との喧嘩を引分けなければならなかったのです。

「親分」

どこかを漁って歩いたらしい八五郎が、縁側から顔を出しました。

「何んだ八」

「変なことを聴き込みましたよ」

「？」

「あの大夕立の真ッ最中に、平野屋の若旦那の金之助が、お園に会いに来たらしく、濡れ鼠になって、ここから帰って行ったのを見た者がありますよ」

「そいつは手掛りだ。ちょっと平野屋まで行って見よう」

「あっしも」

「待ちなよ、お前には用事がある」

平次は八五郎の耳へ、何やら囁やきました。

「なるほどそいつは良い考えだ」

八五郎は話を半分聴いて飛んで行きます。

「師匠。せっかく此処へ来たんだ、お袋と仲直りをした上、

しばらく手伝って、仏様の始末をして行くがよい。あのまじや通夜もなるめえ」

平次は隣りの部屋の死体を痛々しく振り返るのでした。

「私もそのつもりで参りました。おっ母さんさえ承知して下されば」

お組はいそいそと立上がりました。生前の深刻な恋敵、ツイ先刻揃み合いの喧嘩までした仲ですが、生死の境を隔てると、昔の昔の、幼な友達のお組とお園になるのです。血に塗れた死骸の側に膝をついて、ツイ涙に暮れるお組を見つめると、平次はもう次の活動の舞台へ踏み出しておりました。

六

「あれは？」

夕明りの中にしゃんぼり立っている十七、八の娘、町の一角を、ほのぼのと明るくしたような、それは言うに言われぬ可憐な姿でした。

「お園の内弟子で、お菊という娘ですよ。ちよいと良いでしょう親分」

八五郎は小戻りして教えてくれます。こと苟くも、若い娘の噂に関する限り、見過しも聴き過しも出来ないのがこの男の性分でした。

「お前はお組の家へ行ってくれ。急ぐんだ、あの女が帰る前に——」

平次は家の中にいるお組に気を兼ねて、八五郎の道草をたしなめます。

「お菊坊の口を開けさせることなら、あっしの方が心得てますよ、親分」

「わかったよ——俺は口説きもどうもしないから、安心して行くがよい」

「へえ」

八五郎が未練らしく姿を隠すと、平次は改めてお菊の前へ——精いっぱいさり気ない顔で立ちました。

「お前にちょいと訊きたいことがあるが」

お菊は顔を挙げました。隣り町に住んでいて、銭形平次の顔も知っており、その評判も心得ておりますが、名ある御用聞にこう声を掛けられると、十八娘の心臓が高鳴るらしく、道具の細々とした顔が引締って、可愛らしい唇があのきまします。

この臆病らしい小娘から、筋の通った話を引出すのは、平次にしても容易ならぬ手数でしたが、でも、さんさん手古摺らした末、よく遊びに来るのは平野屋の若旦那と、投げ節の小三郎さん、それに御浪人の阿星右太五郎様——などと覚束ない指を折って見せるところまで、心持がはぐれ

て行きました。

「そのうちで、師匠が一番好きだったのは誰だえ？」

「若旦那の金之助さんでしようか知ら、——小三郎さんはよくいらっしゃるけど、嫌われてばかり。帰ると塩を撒いて掘き出すんですもの」

などとお菊は可笑しがるのです。

「御浪人の阿星右太五郎様は、もう四十過ぎの年配じゃないか」

隣り町に住んでいる有徳の浪人者、小金などを廻して呑気に暮している中年過ぎの男が踊りの師匠のところに出入りするというのは臍に落ちませんが、先刻小唄の師匠のお組が、殺されたお園を怨む者の名の中に、この浪人者を加えていたことを平次は思い出したのです。

「あの阿星右太五郎様の一人息子の右之助様は、師匠と好い仲だと言われておりましたが、今年の春お勤めの不首尾とやらで、甲府で腹を切ったとか聞いております。師匠もそれを話しては気の毒がっておりましたが」

平次もそれは薄々聴かないではありませんでしたが、お菊の口から改めて聴かされると、お園の死と何にかしら、一脈の関係がありそうにも思えるのです。

「お前はあの雷鳴のとき、何処にいたんだ」

「お向うの店先に雨宿りをしていました。お師匠さんが怖